

会 告

重心動揺計の機器精度に関する注意事項

重心動揺計は、長期にわたる研究の結果、臨床検査のための機器として1987年に医療機器としてのJIS規格が認められ、1988年に日本めまい平衡医学会で、重心動揺計検査法の基準が定められて学会認定の臨床検査となった。さらに、重心動揺計検査は、1996年に平衡機能検査の一項目として保険診療に採用され、これ以降本検査は、一般臨床における平衡機能検査として広く施行されるようになった。

ところで、臨床検査機器は検査精度が極めて重要であり、重心動揺計の場合も、検査精度が検査結果に大きな影響を与えることから、データの不正は、誤診・誤判断に繋がる可能性がある。検査機器の精度を維持することは、使用者責任になっている。

最近、患者紹介の際に、重心動揺計検査データが添付されるケースが増加し、そのデータが臨床所見と合致しない事例が報告されていた。

これに関連して、重心動揺計の精度に関する学会での調査の結果、下記に示す問題点のあることが判明した。

○重心動揺計の精度に関する現状の問題点

1. 重心動揺計について、各社の製品について、説明書に記載されている頻度での校正、整備が行われていない場合がある。
2. 重心動揺計の校正、整備が不十分な場合、精度が大きく外れるために、計測値が正確に出力されない場合があり、使用者が誤判断（誤診）する可能性がある。

以上の状況から、下記のように適切な重心動揺計の機器管理と検査につき十分留意した上で、適正な重心動揺検査による診療・研究が施行されるようお願いしたい。

○適切な重心動揺計検査についての留意点

1. 重心動揺計検査に使用する検査機器は、日本めまい平衡医学会が登録したJIS規格（参考参照）に合致した重心動揺計を使用する。この点は、機器導入時に確実に確認する必要がある（JIS規格外の製品がある）。
2. 重心動揺計の取扱説明を熟知し、検査機器管理について十分注意する必要がある。機器メーカーとの連携により、定期的な機器校正を行う。使用者責任にて、検査精度の維持が必要である。

また、研究用に使用する場合には、データの精度が一層重要になることから、機器管理、校正については細心の注意を払い、十分な精度を確認した上でデータの収集・解析を行う必要がある。

3. 重心動揺計検査については日本めまい平衡医学会（現一般社団法人日本めまい平衡医学会）編「イラスト」めまいの検査を参照の上、適切に施行する。

参考：重心動揺計のJIS抜粋（日本工業規格JIS 重心動揺計 T1190-1987）

重心動揺計は、JIS製品であれば、規格上、10Kg-150Kgまでの重量負荷で直線的に位置表ができる。位置精度の誤差は±1mm以内。自由振動周波数は20Hz以上。自由振動周波数は、パワースペクトル解析で10Hzまでの解析精度を得るために決められた。重心動揺計は、精度の高い検査機器であることを知り、JIS規格の重要性を認識していただきたい。

ご質問・不明な点については、学会事務局宛（E-Mail: office@memai.jp）にご連絡下さい。

一般社団法人日本めまい平衡医学会 診断基準化委員会
2013年12月